

町民の声

不可解

神崎 水口 裕一

年末に書類の整理をしていたら昭和47年頃の新聞のスクラップがでてきました。

その紙面の一部に、共働きの息子夫婦の孫を生まれてからずっと世話をしていた祖父は、「子供の教育は子供を知ることが一番大切」と、そう信じて子育てをがんばっていました。息子夫婦の念願がかない、家を新築したので、かわいい孫に「お前のお父さんとお母さんが一生懸命働いて建てた家だよ」と親のありがたさを教えるつもりで言ったところ、「おうちを建てたのは大工さんだ！」と孫にやりこめられた記事がありました。その理屈はへ理屈に近いけれど一筋縄ではいかない、けれど孫はかわいい……。真意がなかなか上手く伝わらないのは過去も現代も同じで、情報化が急速に進歩する

時代は、とかく異質の人間関係ををつくりつつあります。

財政の逼迫した国の苦肉の策で市町村合併の議論が高まり、合併特例法という恩典で地域の活性化を図り、将来の地方自治を進展させようと合併協議会で諸種議論を行っていると思っていた矢先、伊予市が昨年末に、そして、それを追うように中山町も伊予地区合併協議会から離脱しました。

その経緯は新聞やマスコミ報道で承知ですが、肝心の具体的な理由が私たち町民には見えてきません。

時として地縁性や風俗、風習、文化を重んじる国民性は、他地域との生活圏を共有していこうとする感覚はやはり難しいのではないかと感じさせられた出来事でした。

情報化が進み生活



は、過去と比べものにならないほど便利で豊かになりましたが、日本人の心の奥深くある不易の気持ちは、生活様式がいくら変化してもなんら変わらないのかもしれない。合併が白紙になった今、行政は町民に対して最大限の努力を行い、議会は町民の負託に応え、町民は町民としての権利と義務を行使して、人々みどり輝くぬくもりのある松前町になるよう三者一体となって取り組んで欲しいと思っています。

傍聴席



12月議会を傍聴して

Y・S

12月定例議会の一般質問を傍聴しました。町議会の傍聴は実に20年ぶりであり、その当時に比べ新装なった議場はとて落ついた雰囲気であり議会の様子もテレビの国会中継でみられるようなヤジなどほとんどなく、静粛な緊張感のあるものでした。

質問者は新人議員2名を含む4名で、質問の内容は町道路行政、児童福祉、教育改革、保健医療、生活環境、町づくり、市町村合併についてなどいずれも私たちの日常生活に関係の深い

もので、議員の活動を身近に感じました。また、これらの諸課題に町長はじめ理事者側が真剣に対応されていることも実感したところです。ただ、現在も市町村合併については、いまま歩踏みこんだやりとりが欲しかったように思われますが、時間的制約やあの時点での伊予地区合併協議会の進捗状況等から考えるといたしかたなかったのかなと思います。

当日の傍聴席は満席の盛況で、このうち8割強が女性でありあらためて女性パワーを見せつけられたように思います。私たち男性も議会に議員を送りこむだけでなく、議会や町政への関心を表示する具体的な行動のひとつとして議会傍聴を心がけてはいかがでしょうか。

